

多文化化する社会のなかで

東京外国語大学教授 野本京子

1 はじめに

現在、日本では多くの留学生が学び、生活している。独立行政法人日本学生支援機構の調査によれば、2008年5月1日現在の留学生総数は前年比5,331人増の123,829人であり、過去最高を記録している。

出身国（地域）別にみると、中国（72,766人）、韓国（18,862人）、台湾（5,082人）、ベトナム（2,873人）、マレーシア（2,271人）が上位5位を占めている。つまり、圧倒的にアジアから、とくに東アジアからの留学生が多いことがわかる。私たちが「留学生」といったとき、思い浮かべるのはおそらく「英語を話す欧米から来た留学生」ではないだろうか。しかしながら実際には、上記のようにアジアからの留学生が圧倒的に多い。

以下では、私が勤務する東京外国語大学の学生や卒業生との出会いの中での見聞を踏まえ、わが国で学び、地域で暮らしている留学生たちが、どのような問題に直面し、どのように感じているのか、その一端を紹介したい。そして、留学生という「窓」を通じて、多文化化しつつある日本社会の「現在」について考えてみたい。

2 東京外国語大学の留学生

東京外国語大学の学生総数は2008年5月1日現在で約4,000人、このうち留学生総数は約600人であり、小規模大学ではあるが留学生比率は高い。この留学生数には大学院および学部所属の正規生のほかに研究生、そして留学生日本語教育センターの学部進学留学生（予備教育）と教員研修留学生等も含まれている。

学部・大学院関係の留学生（短期も含む）を出身地域別にみると、もっとも多いのが中国ついで韓国、台湾、モンゴル、イタリア、タイと続く。中東やアフリカ、南北アメリカ諸国等、50を超える国々・地域の留学生が学んでいるが、中国と韓国の留学生は外国人留学生総数の約半数を占めている。

東京外国語大学では日本人学生と外国人留学生との共学（IJ共学）を推進してきており、また大学間の国際交流協定校からもひろく短期留学生を受け入れている。ただし、私がふだん接している留学生は、学部日本課程（1学年：留学生30人、日本人学生15人）と大学院地域文化研究科博士前期課程および後期課程に所属している学生たちであり、ここではおもに彼らのことを念頭に置いている。

3 学業と生活との両立

それぞれ夢と希望を抱いて来日し、入学してきた留学生だが、一番の困難は学業と生活との両立である。大学全体でみると、私費留学生の比率は80%以上であり、正規の学部生と大学院生だけでみると、この比率はさらに高い。圧倒的多数を占める私費留学生のうちには、家族からの仕送りをまったく受けていない学生もかなり多く、奨学金の支給を受けられない場合は、自活せざるを得ない。

留学生がアルバイトをする場合は、「資格外活動許可」が必要であり、これを申請すると、週28時間以内であれば就労可能である。また夏休みなどの長期休暇には1日8時間以内であれば働くことができる。この制度によって、授業料と生活費を

ほぼ自力でまかなっている学生たちを数多くみてきたが、これは傍からみても本当に大変である。4年間新聞配達をしつつ、大学に通った卒業生が、「まだ日本での生活に慣れない頃、午前2時に起きて、冷たい雨のなかを転びながら配達した。それを思うと、どんなことでも乗り切れる気がする」といった言葉がいまも心に残っている。

最近の円高は留学生の生活も直撃しており、韓国等の留学生をはじめ、学業の継続に不安感をもつ学生も出てきている。大学でも緊急の援助策を講じており、また民間からの心強い支援もあるが、私費留学生は常に、学業と生活との両立に苦闘しているというのが実情である。

4 「世間」からのまなざし

異なる文化的背景をもった留学生が日本社会で生活していく場合、経済的困難以外にもさまざまな問題に直面する。

その一つが住宅問題である。東京は家賃が高く、その負担も重いが、まず入居に際して日本人ではないという理由で断られるケースがある。貸す側からすれば、ゴミ出しをはじめ、日本の習慣に不馴れな留学生に貸すのは不安だということだろう。入居時の保証人については、近年は個人ではなく、大学等の機関が保証するシステムも導入されており、以前、留学生からよく耳にした「保証人探し」の苦労は少なくなったようである。

このように、私が着任した20年前の状況に比べれば、この住宅問題は多少改善されているように思うが、「国際交流」や「共生」が謳われるようになった現在でも、まだ問題は存在する。しかも、欧米系の留学生より、アジアからの学生の方が難色を示される比率は高いようである。これは何を意味しているのだろうか。

たとえば、「外国人犯罪」に関する報道や、中国での反日運動の報道等が、個々の留学生へのまなざしに反映していることはないだろうか。かなり以前のことだが、次のような「事件」があった。

夏休みのある日、数人が同郷の留学生の部屋に

集まったという。冷房がない部屋の窓を開けて話していたら、ご近所から「騒いでいる」と通報され、パトカーを呼ばれたというものである。しばらくぶりに会えた嬉しさと気安さから気が弛み、つい周囲を顧みずに大きな声で話し、ご近所に迷惑をかけたということであり、留学生も反省すべき点は多々ある。ただ、残念に思ったのは、なぜ、事前に注意をする等がなかったのかということである。

また、アルバイト先でも困惑する場面は多々あるようである。ある学生は、仕事のやり方について尋ねたところ、不満ないし批判と思われたのか、「嫌なら国に帰ればいい」と言われたという。「ことばをつくす」いうか、相手のいわんとしていることを理解する姿勢があれば、無用の誤解は解けるのではないだろうか。

とはいえ近年では、留学生への理解と支援を掲げる地域の活動が活発化してきている。東京外国語大学でも1999年に「留学生支援の会」が設立され、多くの地域の方々が参加している。また留学生自身も地域の小中学校に出向き、出身地域のことばや文化、習慣を伝える活動に取り組む等、自ら積極的に発信することを通じて、相互理解を深めようとしている。このような地道な努力の積み重ねが、多文化化する社会を支えているのである。

5 おわりに

さまざまな困難やストレスを抱えながらも、多くの留学生は希望をもち、誠実に学業に取り組んでいる。私は留学生と接するようになってから、新聞等で得た諸外国に関する智識が、具体的に「あの学生が生まれ育った国の出来事」へと見方が変わった。多言語・多文化化する日本社会が、どれだけ「国際化」し得るかは、留学生だけではなく、地域の隣人として暮らす外国人市民と、どのように日常的に付き合っていくかということも重要な指標である。それは、私たちの「まなざし」をもう一度、確認することから始まるのではないだろうか。